

日本の山村、世界の山村

文学部人文地理学・地域学講座 ◆ 岡橋 秀典



写真1 過疎化が進む中国山地の一集落 (広島県加計町)



写真2 山村に進出した自動車部品の工場



写真3 ムッターズ村の中心部
統一感のある家並みが美しい。大部分は農家民宿を営業する



写真5 ムッターズ村の牛下ろし
9月の中旬、アルムと呼ばれる高地の牧場から牛が帰ってくるチロルの農業を特徴づける行事である



写真4 ムッターズ村をのぞむ
山、教会の尖塔、よく手入れされた農地がチロルの集落景観を特徴づける

山村のイメージ—過疎それともコントリブ—

多くの日本人は、山村をどう捉えているであろうか。そこに、まず過疎、不便といった明らかにマイナスのイメージがあることは疑いない。しかしその一方で、豊かな自然、ふるさとなどの肯定的なイメージも存在するようである。最近よく目にする「コントリブライフ」という言葉のように、後者のイメージは徐々に強まってきている。

山村の「周辺地域」化

戦後のわが国山村の変容を特徴づけたのは、言うまでもなく過疎化である。その人口減少があまりに激しいものであっただけに、それを山村地域の崩壊に結びつける見解が数多く見られた。中国山地で一時期多発した学舎離村は、そうした見方を支持するものであったに違いない(写真1)。しかしながら、わが国の山村は高度経済成長期を経て、今日それとは違った側面を有していることも事実である。過疎から脱却したというのではないが、わが国の経済構

造、さらにはその空間編成の変化によって、山村自体が再編成され、新たな存在基盤を得ている。そうした側面を見るには、「過疎地域」としてよりも、「中心地域」に統合された「周辺地域」として捉える方が適切と言えよう。

一九六〇年代以降の経済の高度成長は、大都市部で大量の労働力需要を生みだす一方、薪炭生産を始めとする在来の農林業生産の衰退をもたらした。山村の経済的基盤を急速に弱体化させていった。その結果、山村から大量の人口流出がおこり、いわゆる過疎問題が発生したのである。しかし、一九六五—一九七〇年頃から、山村では「過疎以後」とも称すべき新たな局面が認められるようになった。従来の農林業部門の後退がさらに進む一方で、山村経済が曲がりなりにも一定の展開を見せたのである。それを可能としたのは、工業の山村への進出(写真2)、公共土木建設事業の拡大、そしてそれらに関連した雇用と所得の拡大であった。これによって、世帯所得の向上が見られ、中高年層の定住がある程度可能となった。

チロルの山村から

将来を考えると、この周辺性の克服が課題とならざるをえない。

ヨーロッパアルプスの山村に目を向けてみよう。昨年、オーストリアのチロル州の実態をつぶさに見る機会を得たので、その例を紹介する。まず驚かされたのは、人口減少を来している町村がきわめて少ないことである。しかも、日本の山村のような極端な高齢化も見られない。こうした人口面の特徴は、何よりもその経済的基盤から説明される。日本と異なり工業のウェイトは小さく、ほとんどの町村が観光産業に依存している。しかもその宿泊施設は、農家民宿、ペンションからリゾートホテルまできわめて多様なものからなる(写真3)。また滞在型観光のため、観光客の地元での支出も多く、商業機能の拡充にも寄与している。

こうした分散的な観光の浸透は、政府の積極的な振興策によるが、ヨーロッパの核心地域というべきその位置の有利性も見逃せない。週末ともなれば、ドイツ方面からアウトバーンに乗って多くの旅行者が流れ込んでくる。チロルで注目すべきは、地味であるが徹底した山地農業の保護と、それによる景観保全である(写真4)。アルプスの美しい風景は、決して所与の自然のものではない。そして、こうした山村に対するきめ細かい政策を可能と

世界の山村は今

世界の山村は、発展途上国であれ先進国であれ、市場経済の浸透により「周辺地域」化しつつあるのが現状である。その結果、政治経済的な外部支配、生態系の破壊の問題が深刻である。地球規模の環境問題が言われる今日、山村空間のもつ豊かさを改めて見直す必要がある。今後も、山村という「周辺の」地域から世界を見つめていきたい。

プロフィール

(おかし・ひでのり)

- ◆ 一九五二年奈良県生まれ
- ◆ 研究領域は、現代農村の人文地理学的研究
- ◆ 日本とヨーロッパの山村研究のほか、発展途上国、特にインドの問題にも関心を持っている。

